

地域民話部門 講評

國學院大學 文学部 教授 花部 英雄

今年度の「地域民話研究部門」の大きな特徴は「個人の部」の作品がまったく振るわなかったことを、まず報告しなければならない。とはいえ、「団体の部」の入賞作品は、例年に勝るとは劣らない優秀な作品があるので、コロナ禍がどのように影響しているのか、読めない状況がある。団体の場合は既定の活動をやるわけにはいかないが、個人の場合は自主的に取り組まなければならない点、積極的に作品制作に打ち込む余裕がないのかもしれない。高校生もじりじり追い詰められている現状なのかもしれない。

「団体の部」では、歴史に結びついた民話や地質に関わる研究にいいものがあった。民話は時空を超えたロマンを秘めたものという一面もあるが、現実の生活や環境に根ざしたものも多い。古代の交通と民話との関係性、戦国領主の戦いを背景にしたもの、近世の義民伝承、城主と狐との確執を話題にしたものなど、それぞれの地域の歴史への強い関心が読み取れる。また、地質と伝説とのかかわりをテーマとしたものは、自然環境への関心が根底にある。現代に生きることは、自分の身近な日常生活だけが関心事でないことを、これらの作品は提示しているといえる。

「個人の部」の作品が極端に低調であったということは冒頭に述べたが、唯一佳作に取り上げたのは地域の伝説を紹介したもので、伝説と自分とのかかわりがとても自然で、民話とはこういう心意で愛好され伝承されているものだと思えて実感した。伝説は地域に生きる暮らしがダイレクトに表現されるもので、毎日眺めている山や川にしだいに情が移っていくものといえるのかもしれない。

それを思うにつけ、インターネットを駆使しての作品作りは見劣りがして、今回もそれについての苦渋を述べなければならない。ネットの画面を見ながら作品が構成されていくのは、確かに魅力的なのであろう。無から有が形作られるのであるから、それも短時間の営みでのことであるので、これには手ごたえがあるのだろう。

ただその手ごたえに、自分のどれほどの苦労や葛藤があるかを考えると、それはバーチャルのものでしかないと言わざるを得ない。大事な時間をパソコンを前に目と手の感覚だけで作品を作るのは、創造の営みではない。ただ、これは指導者の問題かもしれない。そうした作品を安易に認めてしまえば、創造力、創作力を退化させていることを、教育の場で気長にしっかりと是正させていく必要がある。方法は問わずに作品形成が本人のレベルアップにつながっているのだと考えて、本コンテストに参加するのであれば、それは教育以前の問題である。

ところで、苦言はこれまでとして、このコンテストが求める理想を説くことも大事である。民話とは、庶民の労苦の多い日常に休息と安寧を与えてくれるものである。学問的には「昔話」「伝説」「世間話」を指している。「昔話」は物語的興味に溢れたものであり、「伝説」は生活上の知識や歴史の出来事など、成人男子が修得しなければならない知識教養などである。「世間話」は、日常の事件や人の噂、自然や天変地異の不思議など、興味本位なところに特徴がある。それぞれには特有の性格があり、年齢や立場による享受の違いもある。

その民話の研究には、民話そのものの研究と、民話の活用という問題がある。地域における民話の特徴を明らかにし、それがどのように形成、伝承されてきたかを調べることが重要である。また、民話の活用は、民話を遺産や資源として多くの人に知ってもらおうと同時に、新たに生かし利用していくことでもある。民話を新しい時代のステージで創造していくことは、民話の課題といえる。

毎年のことであるが、審査基準、評価のポイントを示す。第一に、民話の採集地や伝承地を訪ね、地域環境から民話をとらえているか、それに付随するフィールドワークを行なっているかどうか。第二に、その民話に関わる文献や記録資料を調べ生かしているかどうか。第三に、調べた資料等を十分に分析考察し、それを自分(たち)の言葉で論理的に提示されているかどうかである。その観点から今回の入賞作品の審査結果を報告する。

〇団体の部

最優秀賞

「民話の伝承と古代下野国における交通網の関係～地域の民話から史実を探る～」

栃木県矢板東高校

本研究は民話(一般には「伝説」という)のモチーフの変化や伝播(移動)を取り上げ、それが歴史や地域の条件によってどのように変化するかを話題にしたもので、科学的な伝説研究を目ざしたものと評価できる。全国的な規模で資料を収集し、その比較対照による類似や差異を明らかにするという追究方法は的確である。

ただ、本研究には課題も見られる。那須与一の「鎬矢」では歴史的文献の比較において、文献は記録者の関心や目的により内容が異なる性格があり、比較には慎重を期する。多くの類似資料を参考にした分析が必要である。続く、「九尾の狐」に関わる地域伝説の違いを、古代の交通の「伝路」の事跡に特化してしまうのは賛成できない。類似するモチーフを相互関係や地域の環境など、多面的な追究をした上で、結論を出したい。

以上は、学問的な伝説研究の水準を提示したものであり、高校生の研究の現実を踏まえたものではない。しかし、もう一つ上のステージに上がって研究を続けて欲しいということで、辛口な批評になったことをご理解いただきたい。

優秀賞

「伊予に狐はいない “いよ” —河野氏と狐伝説—」

愛媛県立松山北高校

伝説を寓意(アレゴリー)の視点からとらえたユニークな発想の研究である。伊予国を治める河野通直の妻が、ある日二人現れ、詮議の末、一人が狐であることが発覚し殺害しようとする多くの狐が嘆願に現れた。そこで、四国から狐がすべて退散することで赦されたと

いう。この狐寓話の背景を現実の事件から読み解くものである。一つは歴史の観点から通直をめぐる戦い、もう一つは宗教的観点で、真言宗高野山詣での宗教統制の問題があるとするが、二者どれかの結論がないままのようである。結論はともかく研究の過程が重要とする見方もできるが、ただ、「領主批判」を避けるために寓意と用いたとするが説得力に乏しい。誰がどのようにして寓話を作成したのかの検証も必要である。また、こうした「伝説の寓意」の例が、全国にもあるのか、さらなる事例研究が欲しい。

優秀賞

「自然から生まれる民話たち～光礁・五色浜の地質調査から～」

鹿児島県立鶴翔高校

自然環境から生まれた伝説を、科学的な知識にもとづいて分析し、伝説の成り立ちを追究した研究である。ユーラシアプレート上の西南日本の地層には、微生物の堆積や火山噴火などによる複雑で独特の地層が形成された。その一つが阿久根付近の海岸にある「光礁と五色浜」である。

本研究は、その地質学的な実態観察にもとづきながら、『三国名勝図会』や伝承に見られる奇岩や神秘的風景などを、科学的に解明し、解説を試みたものである。この方法を用いて日本の歴史や伝承を検討する意義をも説いている。神秘的、怪異的にとらえられていた伝説に科学的メスを入れたものとして評価されるが、一方、それ以前の奇岩奇勝の伝説の解釈の形成にも心を向けたい。

佳作

「久保木地区の伝承」

愛媛県立西条高校

山間部のため年貢米を現物で貢納できない久保木の有志が、嘆願書、直訴に及んで処罰されるという悲劇を、「義民伝承」として伝えているのを調査した研究レポートである。久保木地区をフィールドワークし、墓碑などの関係場所および施設を確認し、現在の住民に聞き取りなどを行い、当時の歴史的事情などを丹念に調べまとめたものである。また、その悲劇を後世に伝える意義を理解し、幼稚園で紙芝居を披露するなどにも取り組んだ実践記録でもある。ただ、現代からすると、なぜに十六人までも処刑されるのかの、量刑の重さが伝わってこない。銀納がなぜだめなのか、他藩ではどうだったのかなどの歴史的解釈や背景について、もう少し追究が欲しかった。そうすればもっと説得力が出てくるはずである。

佳作

「桂蔵坊狐伝説について」

鳥取県立八頭高校

本研究は、鳥取城にまつわる「桂蔵坊狐」伝説が何を意図して作られたものかを追究するために、文献や傍証資料などを調査した報告である。まず、関係記事が載る文献調査から始め、また、現地調査を行い、補足すべき資料や傍証となる演劇関係の資料にまで手を広げるなどして資料確認を行った。その結果、時代が下るにつれ伝説モチーフに変化が見られることが明らかになった。近代に入っても欠落や改変などあり、一つの伝説が時代の動向や信仰、芸能などと関わって成長したり衰退したりしている姿が見られるという。本論の後に多くの資料を載せた意義は大きいですが、ただ、その資料の精度の高い読みと、資料間の関係等の分析や考察に、もう一工夫が必要であると感じた。

□個人の部

最優秀賞 なし

優秀賞 なし

佳作

「豊橋市の昔話、伝説について」

愛知県立豊岡高校 鈴木美砂

本作品は愛知県豊橋市伝わる「伝説」(学術用語における名称)六話の報告である。いずれも地域の山や川などにまつわる素朴な自然伝説で、それぞれがほのぼのとして心に沁み込んでくる印象がある。これらの話が自分の体験とともに今も息づいているというのは貴重な思い出である。ふるさとの伝説に寄せる愛着が報告をうながしたものであるとすれば、次にはこれらの話の成立や背景、他地域の類似の話と比較し、さらに深めて欲しいものである。

ところで、一つ注意して欲しいのはそれぞれの話の出典を明示すべきである。伝説は語り手や筆録者によって大きく異なることもあり、また著作権者の情報を示す義務もあるからである。